

ドイツ自治体が、子ども・子育て環境に必要だと考えていることは何か? (注)

ドイツ在住ジャーナリスト 高松 平藏

目 次

1. はじめに
2. エアランゲン市の子ども・子育て環境
3. ドイツの都市の特性
4. 赤の他人同士をくっつける装置
5. ドイツの生活時間
6. 経済立地要因としての「家族に優しい都市」
7. 永遠のベータ版としての子育て環境
8. おわりに：「社会」の中身が日本と異なる

(注) 本稿は、株式会社日本総合研究所が高松平藏氏を招いて、2021年12月13日に開催したオンライン勉強会の内容を掲載したものである。高松氏の許可を得て編集し、すべての文責は株式会社日本総合研究所にある。

1. はじめに

私は「地方都市の発展」をテーマにしており、『ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか』などの著書もあります。個人的なことを申し上げますと、子どもが三人います。皆すでに成人ですが、かつて7割イクメン、3割ジャーナリストという時期がありました。結果的にこの時期、子育て環境だとか家族環境の参与観察ができました。こういう経験も踏まえて、お話ししていきたいと思います。

最初に今回の結論を3点申し上げておきます。

ドイツと日本の同程度の規模の都市を比べたときに、質的な違いがあるんです。その質的な違いからドイツの独自性を導き出せますが、子ども・子育て環境に関連性があるということ。これが一つ目です。

二つ目が、ドイツの都市に求められることが「生活の質」であるということです。いうまでもなく、都市には子どもからお年寄りまで、いろんな方が住んでいますから、そのなかで最大公約数として求められるのが生活の質なんです。

最後が、「結論」というよりも、今からお話しするドイツの様子について、「われわれはどう見るべきか」という点ですね。この手の勉強会や講演で聞いてくださる方が期待されるのが、「ドイツの先進事例」ということがよくあります。しかし、極論ではあるのですが、ドイツに先進事例というのは一つもないんです。あくまでもドイツの社会や価値観、歴史のなかで確立されたもので、日本から見たときに、「これは先進事例だ」と勝手に思い込んでいるだけです。

こういう思い込みは根深く、日本という国の性質ともいえます。歴史を顧みると、とくに明治以来150年、すでに出来上がった欧米の概念やモノ、システムなどを「先進事例」として日本にコピーしてきました。近代化を急がねばならない当時の事情を考えると正解だったと思いますが、結果的に「外国（とくに欧米）には素晴らしい事例がある」という思い込みが大きくなったといえます。

もちろんそれに対する反動もあって、とくに2000年代に入って出てきた極端な反応が「日本スゴイ」という言葉に代表される日本の賞賛です。あるいは「ドイツでは」「アメリカでは」と欧米の事情を「すばらしいもの」として紹介する人が「出羽守」といって叩かれることも出てきました。私自身も執筆した記事に対して「あいつは出羽守だ」とプチ炎上がおこることがあります。「ドイツはすごいぞ」と強調しているつもりは全くないし、よく読むとそれは分かるはずなんです。

今回のテーマである子育て環境についても、ドイツの何を見て、どうするかが大切です。事例をどうコピーするかというよりも、「なぜ成り立っているのか」「なぜ日本からみたときに先進事例に見えるのか」といった問いを立てることが大切だと思います。「なぜ成り立っているのか」というのは、私の視点からいえば、結論として申し上げた最初の2点「ドイツの都市の質的な特徴」「生活の質とはどういうもので、どのように都市に反映されているか」というところがとても重要になってきます。

2. エアランゲン市の子ども・子育て環境

- 気軽に行ける遊び場、公園の選択肢が多い

私が住んでおりますエアランゲン市というのは人口11万人。その町の「子ども・子育て環境」がどんなものか、駆け足で紹介しましょう。

まず、住み始めたときの印象をいえば、遊び場とか公園が多い。先程申し上げたように、私もイクメ

ン時代というのがありました。拙宅は割と市街中心地に近いところにありますが、普通に歩いていけるところに三つぐらい公園があった。ちょっと足を延ばせば、さらに選択肢が増えます。

以前、ベルリンに住んでいる日本の女性が、子育てをしていらして、近所にいっぱい公園があるのが助かるんです、とおっしゃっていました。私から見ると、ベルリンというのは1番ドイツらしくない街なんです。にもかかわらず、ある程度そろっているというのがうかがえます。また、この女性は地方出身の方なのですが、子どもと気軽に行けるところがなく、自動車で移動ということになるようです。あとに述べますが、私も地方の出身でして、その状況がよく理解できます。

・市役所の広場の家族イベント

次に、市街中心地を見てみましょう。ドイツの都市論なんかで、中心市街地は「市民の居間」という言い方が時々出てきます。この捉え方を意識して聞いてください。

まずエアランゲンの市役所とその前の広場を見てみましょう。位置的に言えば、中心市街地と市役所は連続しています。そして広場でいろんなイベントが行われます。

例えば、「家族デー」を見てみましょう。どんなことが行われているのかというと、様々な子どもや育児に関する組織がメッセのようにブースを出している（図表1）。ご覧いただいている写真は、おまわりさんと子どもが話していますね（図表2）。警察や救急車、消防車といった社会的サービスの組織がやってくる。それで、子どものみならず親もおまわりさんと対面で誰でも気軽に話ができる。

（図表1）



（資料）高松平藏氏撮影

（図表2）



（資料）高松平藏氏撮影

それから、NPOに相当する組織、非営利の組織が、日本と比べると、ドイツというのはけた違いにある。今、日本だと5万3,000程度のNPOがあったと思いますけれども、ドイツの場合は60万あります。エアランゲン市、11万人の町で740以上あります。そのなかで子ども、子育て、家族に関連するNPOがブースを出すんです。ほかにもミュージアムや図書館、劇場などの文化施設もブースを出しています。子どもも体験しながら楽しめるし、親も情報を得ることができる機会になっています。

それから、もう1枚、広場で自転車に乗っている親子の写真がありますね（図表3）。エアランゲン

市は自転車道が1970年代から整備された街です。「ハード」ができると、当然、自転車利用者促進にもなる「ソフト」も大切です。それで毎年、市内の施設や組織を自転車でまわるイベントが行われています。町のことを知ることもなるし、家族で参加できるのが楽しいですね。広場は自転車イベントの出発点です。

(図表3)



(資料) 高松平蔵氏撮影

・歩行者ゾーンは日常の「市民（家族）の居間」

ドイツの中心市街地は「市民（家族）の居間」という言い方を紹介しましたが、日本の街のつくりかたから言えば、ちょっとイメージしにくいかもしれません。

この言葉がぴったりくるのが中心市街地の歩行者ゾーンです。ヨーロッパの観光地というのは、たいして中心市街地＝旧市街地です。都市の発祥地なので、中世からの建物などがかなり残っている。これが観光資源になるわけですが、住人にとっては落ち着きや「故郷」の景観です。

戦後、中心市街地を歩行者ゾーンにするところが多かった。そして「街へ行ってきます」と言う、大体この中心地へ行くことを指し、自治体の「絶対的重心」という存在感があります。「自治体のヘソ」ですね。どうしてもきれいに守り抜くんだという考え方が強い。そういう場所だから、人通りも多いし、自動車が入ってこないから家族でぶらぶら歩ける。小売店・飲食店も集積した消費地ですが、同時にベンチが置かれて、街路樹も多い。写真でご覧いただいているような「オープンライブラリー」もある（図表4）。結果的に「道路」というよりも「長細い公園」のような空間になっているのが分ります。

(図表4)



(資料) 高松平蔵氏撮影

・宮殿庭園は子ども・家族向けの文化空間にする

旧市街地（＝中心市街地）には広場があるのが特徴です。エアランゲン市の場合は広場と貴族が作った広大な宮殿庭園とがつながっています。こういう場所も使い倒しています。例えば庭園では5～8月にかけて8回、日曜日に無料コンサートがある（図表5）。ジャンルはクラシックからジャズ、現代音楽まで様々ですが、家族連れも多い。「子ども向け音楽」の日もあって、この時は小さな子どもがいる家族であふれています。

（図表5）



（資料）高松平蔵氏撮影

庭園なので、芝生の上にシートを敷いて寝っころがるなど、思い思いに楽しんでいます。場所も安全なところなので、子どもたちが奇声や大声をあげない限り、ある程度放ったらかしにできるので、親同士がおしゃべりもしやすい。旧市街地にあるので、もともとウォークアブルでバリアフリーです。だから手押し車の高齢者や、車椅子の人たちも庭園に入ってきやすいし、ベビーカーは言わずもがなです。

このプログラム、市の文化局主催で40年以上やっています。文化局に言わせると、「エアランゲンでこのコンサートを聴いて育った人がいっぱいいる」と。

同市では文化系のフェスティバルもたくさんあります。ご覧いただいている写真は、同じく庭園で、文学フェスティバルの時の様子です（図表6）。フェスティバルというのは間口が広くて、政治性のある硬いテーマも扱いますが、写真のように、子どもや親子連れのための絵本の紹介や朗読などをこういう場所で行っているんですね。

（図表6）



（資料）高松平蔵氏撮影

・政治教育と家族向けイベント、盛りだくさんの広場

旧市街地の広場でも毎年定期的にはいろんなフェスティバルがあり、盲導犬や救助犬、救急車といった社会サービスのことをいろんな形で見せてくれます（図表7）。写真でご覧いただいている子どもは怪我をしたのではなく、「救急車体験」ですね（図表8）。

（図表7）



（資料）高松平蔵氏撮影

（図表8）



（資料）高松平蔵氏撮影

スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんがはじめた「未来のための金曜日」という環境運動がありますね。子どもや若者中心のデモが行われるのも広場です（図表9）。コロナ前のデモでは5,000人集まった。日本だと全国で5,000人程度だと聞いていますからずいぶん異なります。ドイツは政治参加を小学生から教えます。それを実行できる場所になっているかたちですね。

（図表9）



（資料）高松平蔵氏撮影

・「使い倒されている」中心市街地

中心市街地は小売店・飲食店もあるので、それだけを見ると例えばイオンモールに近い機能がある空間です。ただ、決定的に違うのは、イオンモールは明らかに資本の論理でできた施設。それに対して市街地は完全に公共の空間ですので、楽しんだり、くつろいだりできる。さらに社会運動とかデモとかが日常的と言っていいほど、いろんなものがあるんですね。もっとも日本でデモとか社会運動というと、こぶしを振り上げたりとか、スピーカーでかなり立てるようなイメージがありますが、そういう雰囲気のものにはほぼなくて、静かなものです。「我々はこういう考え方を共有していて、それを提示するんだ」というものです。今日感覚でいえば、何らかの意見をFacebookに投稿し、その際、共有範囲を「公開」にするようなものでしょうか。

(図表10)



(資料) 高松平藏氏撮影

市街中心地に、文化施設も集中しています。「母語の日」という多文化共生の取り組みでは、図書館でルーツの言語の絵本を音読するような機会がある。ご覧いただいている写真がそうで、この時はトルコ語だったと思います(図表10)。

ミュージアムでも都市の歴史をはじめ、展示会に合わせた子ども向けのワークショップの類がいろいろあります。私も子どもが小さい時によく連れていきました。

・会社や組織がつくる、子ども・家族向けイベント

ほかにも子どもや家族連れで参加できるものは枚挙に暇がありません。市街中心地から離れて、エアランゲンの街全体をみると、周りが森になっています。森のなかに体験学習センターがあって、1年に一度、子ども向けのフェスティバルがあります(図表11)。

(図表11)

それから、教会のフェスティバルとかオープンイベントが多いですね。オープンイベントとは、病院や会社、消防署などが、いつでも誰でも来てもいいよ、「ドアを1日あけておきますよ」という日をつくるんです。会社や組織からいえば、「社会に『開く』プログラム」です。スタッフが趣向を凝らして組織について説明し、訪問者に体験してもらったりする。あるいは施設の道具や商品を使って、余興のようにパフォーマンスを見せたりすることもありま



(資料) 高松平藏氏撮影

す。また、ビールや軽い飲食ができるコーナーを作ったりとか、家族で訪れて半日ぐらいはぶらぶら見ていたりできます。

- ビール祭りにも「家族の日」をつくる

ドイツといえばビールが有名ですが、あちらこちらの村や都市でビール祭りがある。エアランゲン市でも10日余り開催される大掛かりな祭りがあり、延べ100万人以上来ます。たいへん賑やかで、夜に小さな子どもを連れていくのは「無謀」という雰囲気があります。それに対して「家族の日」「高齢者の日」という日を作るんです。「うおー」と盛り上がるだけの雰囲気とは違って、落ち着きのある環境をつくる。これも家族に優しい取り組みの一つといえます。

- 「習いごと」ではないスポーツクラブ

ドイツにはスポーツクラブというのがたくさんあります。日本でいえばNPOで作られたスポーツコミュニティという説明がつく。例として柔道を見ると、「家族コース」をつくっています（図表12）。小さい時から試合を前提にしている日本に比べると、ただ遊んでいるように見えるような内容ですけど、小さな子どもが親子で参加している。また日本でスポーツということなぜか「習いごと」とされるのですが、スポーツコミュニティに参加しながら身体能力を伸ばしたり、健康維持をしたり、他人とかかわる機会になっている。子ども・家族向けのコースであると同時に、社会的な能力を獲得していくコミュニティという理解ができます。

(図表12)



(資料) 高松平藏氏撮影

- 自治体のなかの「家族のための同盟」

「家族のための同盟」というものが自治体のなかで作られています。これはあとでもう少し詳しく紹介しますが、家族問題に関するステークホルダーがみんな集まって作っていく話し合いのネットワークです。エアランゲン市での同盟のキックオフでは、子ども・家族の環境に問題意識をもっている市民をはじめ、政治家や行政職員、それから社会文化センターの所長さんですね。こういう人たちが集まって、ワールドカフェのようなかたちで話し合いをしました（図表13）。

(図表13)



(資料) 高松平藏氏撮影

3. ドイツの都市の特性

• ドイツの都市はモジュール型

駆け足でエアランゲン市の子ども・子育て環境にどのようなものがあるのかを見てきました。「ああ、なるほど、これはすごいな」と思うこともあるかもしれないし、ピンポイントで見ると、「こんなのは日本でもあるよ」という方もいらっしゃると思います。

しかし、これらの取り組みの背景は何か、これを検討することが重要だと思います。その手がかりになるのがドイツの都市の特性です。これについて見ていきます。

まず、ドイツの都市というのは、一言でいうと、モジュール型という説明がつくと思うんですね。コントラストを大きくして言えば、日本の街のつくり方は機能分散型です。ベッドタウンは寝る場所。そこから極端に離れたところに職場を作った。これは経済成長のための国土開発の最適化という側面があるといえると思うんです。

ドイツはというと、歴史的に見ても、特定のエリアのなかで、住む、働く、消費する、余暇、そういったものは全部セットでつくらなければいけない、そういう考え方が強いことが見いだせます。これを一言でいうと、「モジュール型」といえるのではないかな。

そのため、1万人とか2万人の街を比べたときに、日独では質的にかなり異なります。ドイツは、都市のなかに住む、働く、消費する、余暇のためのものを、全部そろえなければいけないという力が働いていて、ある程度実現しているように思います。

もちろんミュンヘンと1万人の街の中心市街地を比べると、広さや消費の選択肢など相当違います。それにしても歩行者ゾーンになっていて、広場があつてと、その機能や役割はほぼ同じといえるでしょう。ドイツは日本に比べると人口が小規模の自治体が多いんですけれども、日本から見ると元気なところが多いという印象を受けます。

• 「使える自然」「短い距離」「安全性」がカギ

こういう全体像をもとに、次は都市計画の視点から見た「家族に優しい」都市とは何か、考えてみましょう。

先ほど、ドイツの都市は何でもコンパクトに、モジュールのようなかたちで収まっているよと申し上げました。そのなかに余暇やスポーツ・運動環境がどのようになっているのかを見ると、まず2種類に分けられると思うんですね。

一つ目は動かすことのできない自然環境。二つ目が公園、施設など人工的に作れる余暇・運動空間です。エアランゲンを見ると、これらをできるだけ短くて快適な接続をしようというような発想が生まれます。快適なというのは、自転車道とか歩道をちゃんとつけた道にすることなんですけれども、できるだけ歩いて行ける道、自転車で行ける道をつくるという意味です。そして、自転車とクルマがきちんと分離したようなものにして、安全性の高い交通環境にしている。

個人的なことをいうと、私の故郷は田んぼだらけの農村です。このように申し上げると多くの方が「自然がいっぱいあっていいですね」とおっしゃるんですよ。確かに田んぼがあるので、フナやザリガニがいるような川もある。でも道路のスペックは近代的とはいえない。田舎であればあるほど、どこへ

行くにもクルマがメインです。まあ、それはドイツの農村部でも同じですが、日本は歩道も少ないし、自転車の専用道もない。クルマとベビーカーを押す人が同じ道を使うわけです。危なくてしかたないんですね。自然はたしかに多いが、子ども・子育て環境としての自然になっているかといえばそうではない。「使えない自然」といえます。

日本は「自然と共生している」とちょっとロマンチックに、あるいは誇りとして言われますが、生活の質という観点からは疑問を感じます。

それから日本の地方にも、何とか公園とか家族向けの何とかセンターなど、余暇のためのものがあるありますよね。それぞれは高いスペックで作られていることが多いですが、街全体を見たときに配置はどうかというと、突拍子もないところに作られていることが散見される。例えて言うと、「失敗したイケメン福笑い」とでも言えましょうか。イケメンの鼻や目、口はそれぞれ格好の良い形をしているんだけど、顔からはみ出たり、額の部分に口がきていたりとか、そういう配置になっていることが多いんじゃないかなと思うんですね。

- 今さら「協働」という言葉は必要がない

それから、施設を造るときに、いかに地域の人たちが参加しながら造っていくかということも論点ですね。エアランゲンを見ていると、市がつくる施設であっても、予算編成前からNPOなどの市民の関与があって、そういうなかで造っていくケースがある。日本で最近、協働というやり方がよく言われますけれども、あまりそういうのを強調して言わなくても、やり方としてある程度確立しているということが見て取れます。

あと、余暇空間の分散型小規模開発も行う。冒頭申し上げたみたいに、私の住んでいるところだけでも、幼稚園児の手を引いて行けるような公園が三つあるという話をしましたけれども、これもバイエルンの州憲法を見ていくと、どれくらいの建物の割合でくつろげて、遊び場になる余暇空間を作らねばならないという法的な背景がある。それでもなお、政治家の口からは「もっと公園を作るべき」という言葉が出てくる。都市というのは限られた空間をどのように使うかということが大前提ですが、そのなかで住む、働く、消費する、余暇といった要素をどのようにして詰め込んで生活の質の高い空間にしようかという発想が見て取れる。これを言い換えればモジュール型の街のつくり方といえるように思うんですね。

4. 赤の他人同士をくっつける装置

- 知り合うきっかけを意図的に作るのが都市の課題

ドイツの都市の特性として、施設やそれをつなぐ交通、都市計画の分野にかかわる、ややハード寄りのことをお話ししてきました。ここでもう一つ、都市には「人間の関係性」という課題があります。

日本と決定的に違うのが、都市というのは赤の他人の集まりという考え方があることです。日本では、プリミティブなムラに見られた、地縁・血縁でつながった疑似家族的なものが内面化されています。これは自分の自由意思で作る関係ではなく、強制性があるとても固定的な関係です。そして今日でも都会のマンションなどでも自治会という地縁的な関係を作りますね。

ところがドイツの都市は、「赤の他人の集まり」という前提がとても強いんです。そして自分の自由意思で、人々が知り合うきっかけを都市のなかで意図的に作らねばならないというロジックが働きます。どういふものに見られるか、三つの例を挙げましょう。

まず自治体の文化政策はその役割を自認しています。日本の地方で、文化政策という言葉自体、ほぼ耳にしませんよね。このあたりも日独違うところです。

次に非営利組織。NPOに相当するものですが、これも赤の他人同士をくっつける装置といえます。そして個人が自分の自由意思で加入したり抜けたりするもので、地縁的な関係とは原理的にまったく違う。これが11万人のエアランゲン市内で740以上あるんです。単純に言えば自分の目的や趣旨にそってメンバーになれる組織に740以上の選択肢があるわけです。

3番目が、都市空間そのものです。とりわけ中心市街地は代表格。ここは「市民（家族）の居間」で、自治体のヘソのような場所であることを最初に述べました。集積性が高く、多機能な公共空間です。ここで人々が会うきっかけができるんです。フェスティバルの類をいくつか紹介しましたが、この時、「あら、あなた、この間の子どもの何とかフェスティバルのときにもいたわよね」というような感じで知り合っていく。そして文化フェスティバルは文化政策の仕事であるわけです。

• 地方政治につながっている

子ども・家族に関係する組織や人のネットワークが都市のなかにたくさんあります。そして、それらが政治ととても近い。連続性があるんです。先ほど紹介した「家族のための同盟」などはその代表格でしょう。参加者の顔ぶれを見ても市議が参加していて、一緒にディスカッションしています。

ここで市議について少し整理しておく必要があります。ドイツの地方議員さんは基本無報酬です。私達みんなの都市のことは、私が自分の自由時間を使ってやりますよ、と買って出るかたちですね。もちろん、選挙を経て市議になるわけですが、基本的に職業ではなく、自分の仕事を持って行うボランティアといえる。そういう構造が反映しているせいか、何か社会運動とかデモとかといったときに、市議がちゃんと入っているのですが、普通に市民運動をしていた人がたまたま市議になっただけという雰囲気があります。

• 公共空間にはアクションを起こす自由もある

理屈っぽい話になるのですが、都市は公共空間であると申し上げました。公共空間の大前提は、誰もが自由に平等な関係でアクセスできる、あるいは使える空間ということです。日本に目を転じると、「公共の場所ではモノを壊さないようにしましょう」「ほかの人に迷惑をかけないようにしましょう」とよく言われます。確かにこれは大切なことなんですけど、平等な関係で参加している場所なんだから、イニシアティブをとる自由もあるんだという考え方はほぼ出てきません。

そのあたりの了解の違いとしてわかりやすいのがPTAでしょうか。昨今、日本でPTAに対する議論がたくさんありますけれども、地縁・血縁的な強制性や固定的な人間関係が内面化していて、それが問題化しているように思えます。

一方、ドイツのPTAに相当する組織を見ていると、学校やクラスに問題があるなと思った人が「私

がやります」と手を挙げる。こういう様子を見ると、ドイツの公共空間に対する感覚がそのままPTAのほうにもあると感じます。

公共空間としての都市を改めて見ると、社会運動やデモも自主的な行動であり、「イニシアティブをとる自由」という感覚が見て取れます。そして公共空間における議論の発生でもあります。こういう運動や議論について、地域の新聞が取りあげ、読者がまた議論について意見を投稿するんです。

ここでドイツの新聞事情を少し補足しておく、地方紙がメインです。1万人ぐらいの街でも、街の名前のついた新聞が出たりします。

ひるがえって都市のなかには「アクションを起こす自由」「公共空間（市街地）での意見表明や議論喚起（社会運動・デモ）」「地方紙での報道と意見の交換」といったものがある。すなわち都市の中に公共の言論空間があるのを見いだせるわけなんです。そして先ほど指摘したように、政治とも地続きです。また「家族のための同盟」なども都市の公共の言論空間にももちろん出入りしている形です。

・他人の自己決定を助ける関係「連帯」

柔道の家族コースを例にスポーツクラブについて紹介しました。日本で子どもにとってこの手のものは「習いごと」と位置付けられ、そしてスポーツといえば「試合に勝つ」ことに価値を置きやすいです。しかしドイツのスポーツは「平等な関係に基づく仲間」というコミュニティです。日頃のトレーニングを通しての社交が楽しいわけですが、それ以外でも、クラブの運営にボランティアで参加したり、手伝ったりする。

平等な関係で参加しているコミュニティですから、ここでも「イニシアティブをとる自由」があります。何かやりたいことや問題があれば、自分達がいつでも提案してもいいし、話し合っただけで決めることができる。とりわけ青少年にとっては、スポーツクラブは「民主シーの学校」と言われることがあります。

それから、スポーツクラブのメンバーになると当然、会費を支払わなければなりません。しかし、家族向けにはちょっと安くしたりしているんです。お子さんがいらっしゃる方は実感があると思いますが、子どもがいると結構家計を圧迫しますからね。

見るべきは家族割引の理屈です。誰でもスポーツクラブに入る自由や権利はあるのだから、家計が大変な人についてはみんなで助けましょう、そういう考え方が出てくるんですね。家族割引は日本で携帯電話の料金体系などでよく見られますが、マーケティングに基づく制度設計です。それに対してスポーツクラブの割引は連帯という考え方で成り立っています。連帯というのは、困っている個人を助けることによって、困っている人もできるだけ自己決定ができるようにしましょう、そういう意味合いがある。

それからスポーツクラブはNPOのような非営利組織です。「好きなスポーツを皆でやる」という部分だけ見ると同好会ですが、クラブには「われわれは社会的組織である」という自認がある。こういうところが連帯に基づく家族割引というカタチで出てくるんですね。

このように、都市全体を見ると、知り合うきっかけを意図的に作る場所から、社会を自主的に動かし、他者を助ける連帯にまで及んでいるのがわかる。すなわち、都市は赤の他人の集まりだけれど、有機的な社会を作ろうとしていて、そのなかに「子ども・子育て環境」という課題・議論・行動も入って

いるかたちです。

5. ドイツの生活時間

• ワークライフバランスがとりやすい

都市全体の視点からお話ししてきましたが、すこし論点を変えて、個人の環境を見てみましょう。

外国人目線でいえば、ドイツの個人の環境は日本とやはり違うんですね。まず見てみたいのが可処分時間、ワークライフバランスの問題です。遊びに行くとか、友達と会うとか、スポーツクラブに行くというのも平日にしている。「家族のための同盟」でも、定期的に話し合いが持たれます。そういう活動にも基本的に時間がないと参加できないわけです。

象徴的な言葉でいえば、ドイツに來られた日本企業の方がおっしゃっていたのですが「ドイツには1日が2度ある」と。そんな感覚にとられるそうです。日本でも働き方改革というのがありますけれども、これを真面目にやると社会的インパクトは相当あると思います。

• 幼稚園が5時に閉まるのは「遅れている」わけではない

人々の行動について、構造的なものを見ると、日本は学校や会社に一日ずっといる。中高生の子どもにしても、部活動を熱心にやっていると、朝練があって、授業のあとも夜の7時、8時まで練習という過ごし方です。

それに対してドイツを見ると、物理的に自分で使える時間が多いのでNPOに相当するようなところに参加しやすい。そのため「NPOで頑張る自分」「会社で頑張る自分」「家族でお父さんとして過ごす自分」というように、いろんな人格が個人のなかで割と並列に成り立っているように思います。

子どももそうです。制度設計でいうと、ドイツの学校というのは大体午前中で終わる。昨今、それもいろいろ変わってはいるんですけども、基本設計はそういうものだというふうにご理解ください。

面白いのが、「ドイツの幼稚園というのは5時に閉まっちゃうんだ、これって遅れているよね」という話を日本の知人たちがしていたこと。果たしてこれは本当に「遅れている」のでしょうか？遅くまで開けておくことが「進んでいる」のでしょうか？

日本の感覚だと、遅くまで開けておくことに価値をおくでしょう。ドイツは5時以降、遅くまで開けている必要がないから、閉まると考えるのが妥当でしょう。

こういうふうと考えていくと、日本で何が進んでいるのか、遅れているのか、という議論をもうちょっと根本的なところからしてみる必要があると思います。

6. 経済立地要因としての「家族に優しい都市」

• 企業が求める拠点地の条件「経済立地要因」

ドイツの地域経済に関する議論で経済立地要因という言い方があります。この考え方は、モジュール型の都市づくりという説明とよく合うんですね。それで、経済立地要因とは何かというと、企業などにとって「こういうものが揃っていないと事業拠点としては魅力がない」という指標のようなものです。

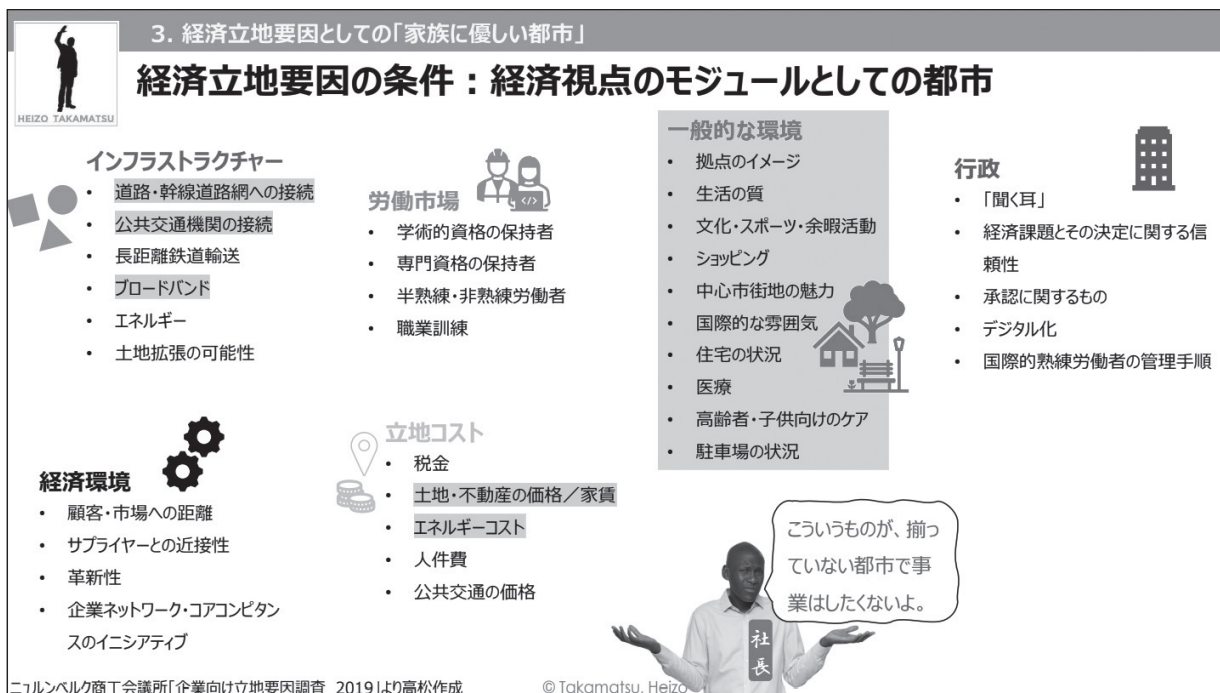
何が揃っていなければいけないか、というのは時代によって変化がありますが、今見ていただい

るリスト（図表14）は、2019年にニュルンベルクの商工会議所の資料をもとに整理したものです。

インフラから始まって、なかなか幅広いのですが、マーカーの部分をご覧ください。このあたりが、子ども・家族にもかかわってくるものですね。

何でこういう条件が企業の立地条件に出てくるのか。日本との対比でいえば、職住が近いということがいえます。企業が雇用する人は、だいたい地元の人なんですね。地元の人で幸せに暮らせていない人が多いと、職場も殺伐とした雰囲気になるのではないのでしょうか。

（図表14）



（資料）高松平蔵氏作成

- 文化やスポーツは雰囲気のいい人が多い地域をつくる

これらの条件をすべて検討していくと、大変なのですが、例えば「一般的環境」の「文化・スポーツ・余暇活動」を検討してみましょう。

都市のなかには文化やスポーツなどの余暇活動の場所や組織があります。

一つの役割としては、外国の人とも一緒に活動をする機会ということです。スポーツクラブなどは「スポーツをともにする平等な関係に基づいた仲間」という考え方がある。これは外国人にも適用されます。

それから文化政策の話になってくるんですが、外国の映画祭などを行うことで、外国の文化理解が進む。子どもたちも国際的な雰囲気に対して違和感がなくなる。

このように文化やスポーツが盛んなところの住人は外国人に対する偏見や差別は少ないと考えられるわけです。雇用する側にまわって考えてみてください。偏見や差別にあふれた雰囲気のある街の人を雇いた

いとは思わないでしょう。また、そういう外国の街へ家族とともに駐在しなければならない、となると抵抗が大きいですね。だから経済立地要因の一つに「文化・スポーツ・余暇活動」が豊富にあるかが挙がると理解できるわけです。

- 「家族に優しい都市」は経済全般にメリットがある

「家族に優しい都市」をつくると、都市全体の経済にメリットがあるという見方もあります。まず家族が多いと、当然、家族向けの消費が増える。自治体からみたとき、これが購買力の向上、あるいは税収になってくる。

それから、「家族に優しい」都市の実現＝雇用者の状況にあわせた働き方ができる事業所が多いということがいえます。そういう事業所が多いと、育休をとっても子どもの状況にあわせた働き方をしやすい街といえます。そしてそのほうが企業にとってもメリットがあるということなんです。

例えば育休の状況を見ると、ドイツでもお母さんが休むことが多い。しかし、子どもの状況に合わせた働き方をしてもらうことによって、育休前から働いてもらっていた熟練労働者を手放さずに済む。また子育てを経た人が職場に戻ってくるということで、社員の多様性につながる。イノベーションや創造性というのは、同質性の高いところより、背景が異なる多様性のある集団におこりやすいわけです。これが企業のダイナミズムにつながると考えられるわけです。

- 子育てインフラという観点

家族に優しい都市は、地域の経済活動全体にもメリットを生み出す構造が作れる可能性があるわけですが、「家族に優しい都市」の条件に子育てインフラを充実させることも求められる。3点例を挙げましょう。

まずは基本的な安全性ですね。犯罪が少ないとか、歩行者・自転車・クルマをきちんと分けた道路が作られていて公共交通機関が充実している。こういったことで家族が安全に移動できる。

2番目は学校・幼稚園で子どもの世話をしてくれるかどうかというのも、ドイツにおいてこれは大きな子育てインフラです。学校の基本設計が午前中で終わりという話をしましたよね。かつては、子どもたちが帰宅したあと、お母さんが面倒を見ていました。しかし、それが難しい家族も増えた。日本の感覚でいえば、学童保育に近いようなサービスを学校につけるべきという議論が10年ほど前からあるんです。

3番目は都市のなかに文化の教育、学習の場がたくさんあるということ。これはいろいろありますが、ミュージアムや劇場なども教育の場です。こういう文化施設が都市にあるかないかが大切なことです。それに加えて、そういう施設で魅力的なプログラムを作るかどうか問われます。

以上のものが広い意味での子育てインフラといえるでしょう。

7. 永遠のベータ版としての子育て環境

- 子育て環境は継続的な改善プロセスである

最後に「子育て環境」を作るとはどういうことかを述べたいと思います。それは永遠のベータ版（開

発途上のテスト版) なんです。完成形がない。

というのも、経済状況、人口動態、価値観といった子育ての「環境」が変化するからです。私の場合、子育てで一番大変だったのは10～15年ぐらい前の話なのですが、当時と今では、いろいろ変わっていると思うんですね。今日紹介したものでも、かつてはお母さんが家にずっといたので、学校に学童保育のようなサービスは必要なかったわけです。

例えば2020年にノルトライン＝ヴェストファーレンという州が出している子育て・家族環境に関する資料をひもとくと、子育て・家族環境づくりを「継続的な改善プロセス」と捉え、三つの大切な視点があると指摘しています。それを順番に紹介しておきましょう。

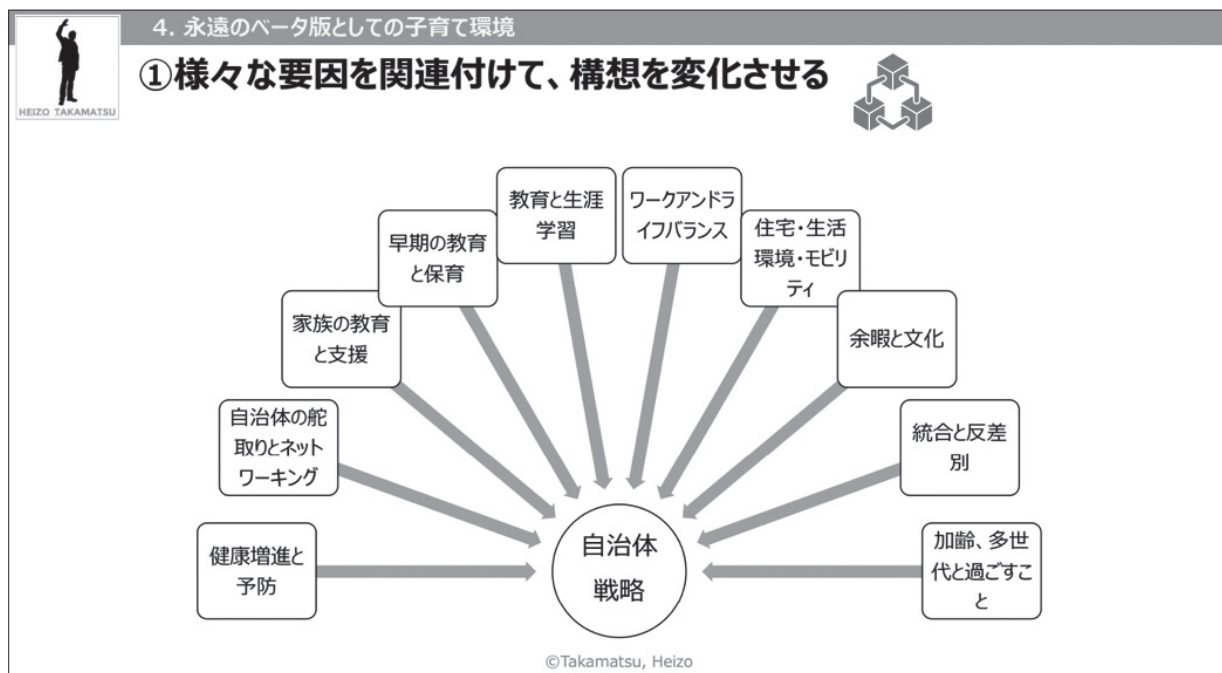
・様々な要因を関連付けて、構想を変化させる

まず、様々な要因を関連付けて、構想を変化させていくということですね（図表15）。この発想、「モジュール型都市発展」と符合する話なんです。子ども・子育て環境というのは、様々な要因と関係してきているんです。こういうものをできるだけ関連付けて、自治体の戦略ということで練り上げていくという考え方です。

この図表15に書かれた「要因」のなかで、日本から見て分かりにくいのは、「統合と反差別」でしょうか。少し補足しておきますね。

日本に比べて、ドイツには外国のルーツを持つ市民の割合が多い。私なんかもその一人ですね。そういう人たちと、どのようにうまく社会を作っていこうかという議論が相当あります。日本の場合、多文化共生という言葉でいわれるものですね。ドイツの場合、これは、身もふたもない言い方をすると同化

(図表15)



(資料) 高松平蔵氏作成

政策なんです。

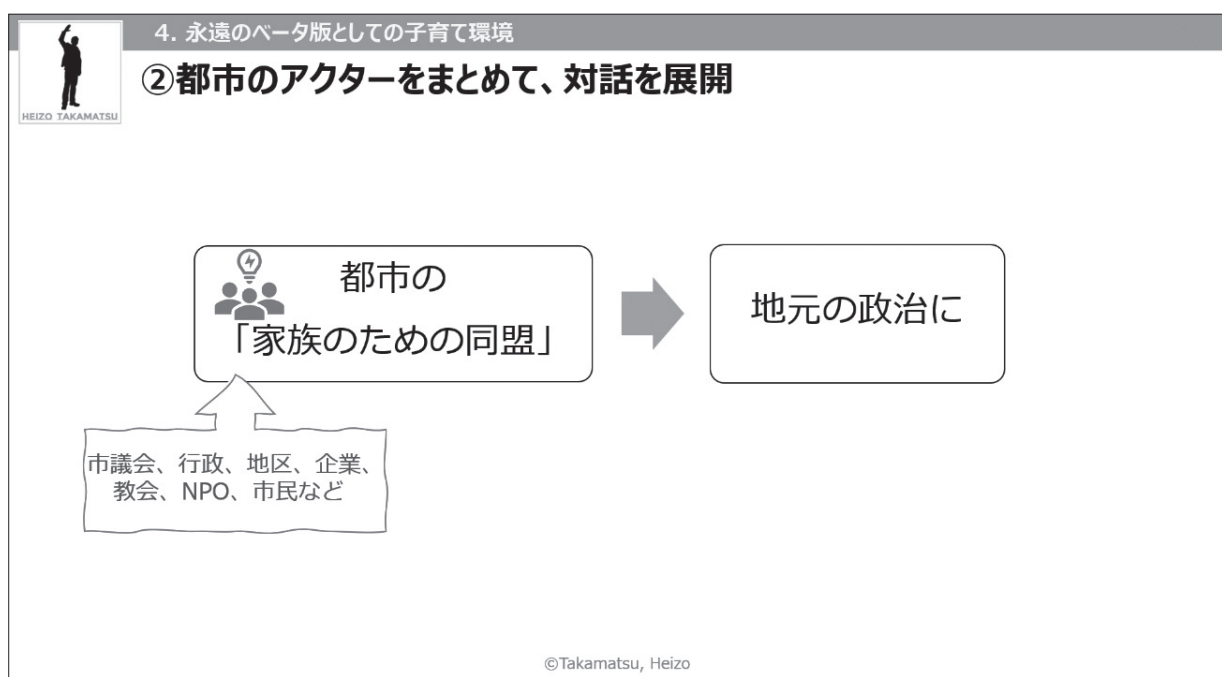
ただ、同化政策というと、強制的でおっかない感じがしますね。ドイツの場合、社会的統合という言葉方をしています。「社会的統合という同化政策」として考えると、次のような説明がつく。まず、ドイツは日本からはちょっと想像ができないぐらい、デモクラシーが社会の隅々にまで行き渡っています。「デモクラシークラブ」のような国なんです。だからこそ、意見の自由な表明が大切で、デモ・社会運動などはその一環です。そして、そこに子どもも参加させていくような仕組みをつくる。こういう自由と自己決定、参加があって「生きたデモクラシー」になるわけです。社会的統合は外国系の市民たちにも、そういうデモクラシーの構造や意味を知ってもらい、デモクラシークラブの一員になってもらおう、そういう考え方が見出せる。だから決して強制ではないんです。ちょっと日本からは分りにくいところですね。

- 都市のアクターをまとめて、対話を展開

二つ目の重要ポイントとしては、都市のアクターをまとめて対話を繰り返し広げていくことです（図表16）。「家族のための同盟」がそうですね。これは各地にいろいろつくられています。その家族のための同盟のなかにどういう人が入っているかというと、市議とか行政職員、地区の人、企業、教会、NPOなど、もういろんな組織や人が入っています。そのなかでワイワイ言い合って、地元の政治につなげていくということをやっているわけです。

この「政治につなげていく」といったときに、いかにも「デモクラシークラブ」らしいつなげ方があるんです。例えばマンホールから臭いが出てきたりします。こういう時、まず市役所に言う。それでも、

(図表16)



(資料) 高松平蔵氏作成

解決してくれない場合、地元の新聞に投稿です。読者の意見を載せるページがありますからね。この時点で意見を公開しているわけですから、一種の公論化がおこっているかたちです。新聞に投稿してもだめだったらどうするかというと、社会運動を展開する。ここまでの手順を実は小学生にも教えています。

デモや社会運動が起こる時点で、政治家なんかも入ってきますから、最終的に議会でマンホールの臭いを止めるための決定がなされることにつながる。

このように見ると、選挙以外のデモクラシーの方法がいっぱいあるんですね。スポーツクラブが青少年にとって「デモクラシーの学校」と言われるのも、そういう話し合いとか提案のプロセスがあるからです。

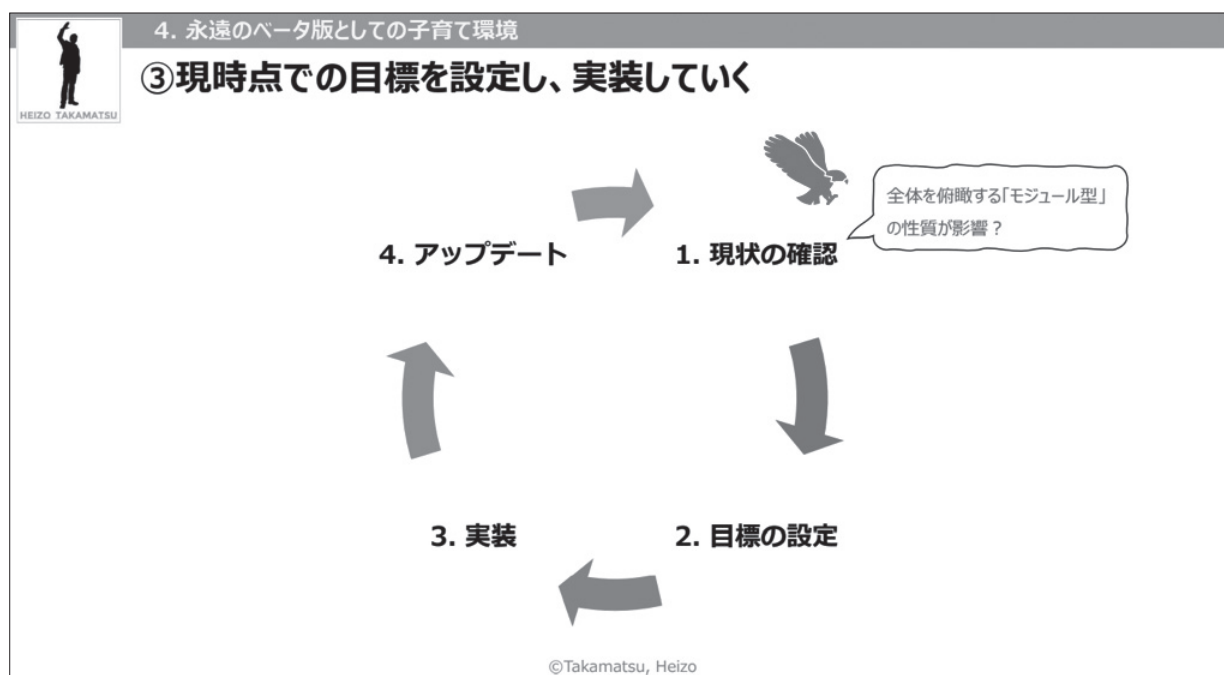
子ども・子育て環境にしても「デモクラシークラブ」の国らしく進めていこうとしているのが見て取れますが、たぶん、いたって普通のやり方でできたのだと思います。

・現時点での目標を設定し、実装していく

三つ目に、現状の確認、目標の設定、実装、アップデート（図表17）ですね。PDCAなどの発想とよく似ていると思いますが、留意したいのが「1. 現状の確認」というところ。ここが日本とドイツの違いが出る場所かもしれない。というのも、ドイツはモジュール型都市を指向すると述べましたが、これは都市全体を常に俯瞰する眼差しが強いです。全体を俯瞰するので、失敗したイケメン福笑いみたいなにはなりにくい。経済立地要因も「都市全体に必要なものは揃っているか」という見方が根底にある。

言い換えるならば、ドイツの都市のつくりかたは全体最適化を目指す傾向が強いです。それに対して、日本は部分最適化のほうへ意識が行くことが多い。だから、もし子ども・子育て環境づくりにこの

(図表17)



(資料) 高松平蔵氏作成

サイクルを活用する場合、部分最適発想の強い「現状の確認」であれば、そのあとの目標の設定や実装の仕方、アップデートの仕方といったプロセスの展開がかなり変わってくると思います。

8. おわりに：「社会」の中身が日本と異なる

以上が、ドイツの地方都市における子ども・子育て環境です。

ここで日本の発想を見ると、例えば「よその子どもでも叱りましょう」とか、「ご近所で育てていきましょう」といった、昔のムラ社会のようなものがある種の理想として語られることが今でもあると思います。

それに対して、ドイツのほうを見ると、個人の問題を社会に開いて、政治的に解決していくという発想が強い。「子どもは社会で育てていこう」といった言い方をしても「社会」の内容が大分違うんです。

都市もそういう発想とうまく組み合わさっている。市街中心地は「市民（家族）の居間」という表現を使いましたが、自由意思でやってきて、平等な関係で滞在する「みんなの空間」なんです。ドイツを旅行した人にいわせると、旅行中アイコンタクトも含めて、見ず知らずの人とちょっとした会話をさりげなく交わすことが、日本にいるときより多いといいます。これが「みんなの空間」での振る舞いであり、だからフェスティバルやイベントを開催すると「知り合うきっかけ」としてよく機能する。

こういったことが日本と基本的に違っているところの一つです。最初に見ていただいたような事例なんかを見ると、ピンポイントでは日本のほうがひょっとしてスペックの高いものがあるかもしれないし、写真で見ていただいたものでいうと、あ、こんなのは日本でもあるよ、というものがいっぱいあったと思います。しかし、それがどういうふう配置されて、どういうふう社会的に位置付けられていて、どういうふう人間関係とか政治が絡んでいるか。そこが違うという見方ができると思います。そして、こういうところをよく見ることで、日本でどのような問いを立てて、どのような議論をすればよいかというヒントが得られるのではないかと思います。

○高松 平藏（たかまつ へいぞう）氏 ご経歴

ジャーナリスト。ドイツ・エアランゲン市（バイエルン州）在住。京都の経済紙を経て、1990年代後半から日独を行き来し、エアランゲン市での取材をはじめ。2002年から同市に拠点を移す。著書に『ドイツの学校にはなぜ「部活」がないのか』（晃洋書房、2020年）、『ドイツのスポーツ都市』（学芸出版社、2020年）、『ドイツの地方都市はなぜ元気なのか』（学芸出版社、2008年）など。